

Ann. Rep. Asahikawa
Med. Coll.
1995, Vol.16, 51~73

死について

岡 田 雅 勝

I 死についての問い

生と死 人はこの世に生きる限り、自分の存在についてさまざまに疑問を抱き、〈自分の何か〉を問い、〈一体どのようにして生きていけばいいか〉などと問いながら生きる。これらの問いを問い続けるなら、究極的に自分の出生や最後の行く末へと向けられる。つまり自分の〈生と死〉に向けられるのである。私たちはこの世においてさまざまな形で生を体験し、さまざまな出来事のなかで生きている。こうした生のただなかに死が潜んでいる。生と死はいつも抱き合わせになっている。生きている限り私たちは死んでいない。しかし生きている限り私たちはいつも死に到る可能性のなかにおかれている。生と死は切り離せない。生きものはすべて死する運命にある。生は受胎の瞬間から始まり、胎児へと成育し、新生児となり、幼年期から、やがて大人へと成長し、ある一定の段階となると老い、決まって誰もが死んでいく。しかしどの生にも瞬間瞬間死がはらんでおり、誰もがこの過程をたどって行くとは限らない。若者の生にも病人の生にも老人の生にも等しく死がはらんでいる。私たちは永遠に生きることができず、死という突き破ることのできない条件のなかで生きている。そして生きている限り私たちは死に不安をもち、死を回避し、死を忌まわしいものと思い、生きている。私たちは、死は忌まわしいものなので、死について考えず生きようとさえしている。

しかし私たちが生きている間、生き甲斐を感じるのは死を背にした行為である。最も生命力の躍動に生きる若者たちの行為、無謀なオートバイの運転、車のスピードの出し過ぎ、カーレース、ハングライダー、スポーツへの打ち込み、ロッククライミングなど死を背にした行為が多い。また死にもの狂いで懸命に何かに打ち込むことに生の意味をみたり、スリリングやアドベンチャーに賭ける行為に生の躍動をみたりするが、それらの行為にはいつも死の危険が伴っている。私たち人間は、死を覚悟したり、死ぬつもりで何かをするとき、大抵最も力を発揮する。これはどういうことなのか。少なくとも人間の生は死を背にしていることだけは言えるし、生と死はけっして切り離すことができないと言える。

死の体験 私たちは死を背にした行為をして生きているが、しかし大抵死について考えずに生きている。私たちは他人の死にさまざまな形で接し、他人の死を体験するが、自分の死を体験しない。自分の死を体験できないので、〈死とは何か〉という問いには、自分の体験をまったく語ることができない。無論私たちは他人の身体的死について知ることができ、それについて語ることができる。それは私たちが実際に経験することのできる事実としての死である。この死については他人と共にその事実を理解することができる。しかし死者の身体的な死について理解できるが、死後彼がどうなるのかを知ることができない。死後についていろいろなことが主張はできる。〈死んでしまえば、身体が腐敗し白骨となり、やがて風化してしまう。それで終わりだ〉と言うことも可能であり、事実身体はそうようになってしまうであろう。過去から死体の風化を早めるため火葬が行われている。しかし問題はそう簡単ではない。古来人々はたとえ身体が風化することが分かって、それでも死後の世界のことを想定してきた。この事実を私たちはどのように受け取るべきか。

〈死後の世界〉は、私たちの検証の及ばない世界であり、それゆえ科学的探究の対象とはなり得ない世界である。〈死後の世界〉はまったく神秘にみち、謎にみちている。誰一人死後の世界を体験したことがないのにもかかわらず、〈死後の世界〉についての人々の想いはさまざまで、さまざまな慣習によって〈死後の世界〉が想定され信じられているし、またさまざまな宗教によって〈死後の世界〉が示され、信仰されている。

生きることは、死するものとして生きているということであり、〈生きる〉ということの意味は〈死すべきもの〉の意味を含んでいる。その意味で、〈生きる〉ことを考えることは〈死する〉ことについて思索をすることである。私たちは生きている限り死を体験できないが、〈死の意味〉について想いをめぐらすことによって、〈生の意味〉をよりよく深く理解できるようになるであろう。

事実としての死—生物学的死と社会的な死—葬儀 事実としての死として生物学的死が挙げられる。生物学的死については、その原因となるのはさまざまで、たとえば何処かの身体の器官の疾患による病死とか、事故死とか、殺人、自殺、老衰などいくつかの原因があげられる。ところで病死のうち大部分の死因は、老化による自然死だとされている。生命の保持にとって重要な器官の組織や機能の老化とされ、それもそれらの器官の組織や機能の不均衡をもたらす老化によるとされる。その直接的な原因として細胞の老化があげられている。たとえば、細胞の老化の説明として、プログラム説とエラー・カタストロフィ説があげられる。前者によれば、遺伝子のなかにはすでに細胞がプログラムされていて、それが破壊されてしまうというのである。後者によれば、生体のゲノムのもつインフォメーションや化学物質としてのDNAの限界があり、エラーがたまり、コントロールができなくなり、細胞の機能が悪化し死に到ると言われている。

自然死についての生物学的説明による原因はどのように細部機能の老化として説明される。その他の事故死とか殺しによる死など、生物学的に説明すると、死は結局どれもがかくかくしかじかの状態になれば、身体の重要な器官の機能が不可逆的に永久に停止する、というように説明される。つまり死の定義として、〈心肺機能（循環機能と呼吸機能）の不可逆的停止〉とか脳幹機能とか、大脳機能などの〈脳の機能の不可逆的停止〉として、これらのことが確認できれば、〈死〉と判定できる。確かに個々の事例においては、問題もあろうが、しかし生物学的な意味においての〈死〉は、上述の条件を満たしておれば、人は客観的な事実としての身体の〈死〉について疑わない。

一般的に社会では、医師によって死亡告知を受け、〈死〉が確認されると死を悼む儀式を通して〈死者〉は火葬、水葬、埋葬、風葬などによって葬られる。〈死者〉はこのようにしてこの世から別れてしまい、埋葬とか、ミイラなどの場合は別にしてすっかり姿を変えてしまう。また死に対する儀式などは、時代、環境、習慣、宗教などによって異なるが、大抵の場合何等か死の儀式によって死者が葬られる。

死の意味 ここで述べようとする死は、こうした事実としての死ではなく、〈死の意味〉に向けられている。それは一人一人にとっての死、つまり〈私の死〉にとっての死の意味に向けられている。

かつてメント・モリ（memento mori 〈死を覚えよ〉〈汝死すべきものであること忘れるな〉）と言われ、ヨーロッパ人たちは象牙などでドクロを彫り、それにこの言葉を刻み、置物や装身具に用い、死を念頭におくよすがとしてきた。人類は死を想い、死からさまざまな文化を創造してきた。トーマス・マンは「死がなければこの地上に詩人が生まれてこなかったであろう」と語っているように、古代から死のモニュメントとして作品が造られてきている。たとえば歴史上最初の叙事詩バビロニアの『ギルガメッシュ』、最初の抒情詩人サッフォーの詩など、どの古典作品もどの時代の文学作品も芸術作品も結局は死がテーマとなっているし、死が背景となっている。ミケランジェロも「死がその鑒をもって彫らなかったどんな思想も私のなかにない」と述べている。さらに文学ばかりではなく、科学、医学、芸術、音楽も死が偉大な靈感を付与してきた。エジプト、アッティカなどの古代美術から現代の芸術にいたるまで死が重要な役割を果たしているし、古代の音楽からバッハ、ベートーベン、リスト、マーラー、現代の作曲家たちに到るまで死が主要なモチーフとなっている。

さらに死は英雄、偉人、学者などは死という偉大な教師に導かれてきた。彼らは死について語り、そのことによって生の最深の奥義に触れている。さらに優れた宗教者や哲学者たちも、当然のことであるが、死に真正面から取り組み、生のなかに死の意味を見いだそうとしてきたし、そのことによって生の意味を探ってきた。このようにして〈死の意味〉

を考えることは、決して忌まわしいことでも無意味なことでもなく、みずからの生をよりよくし、創造的に生きるのにきわめて重要なことであろう。私の狙いは、死についての一般的な考察ではない。自分が生きている限り死んでいないが、死をはらんで生きている自分の生について想いを巡らしてみたい。生は一步一步死に向かって歩んでいる、この事実を考えてみたい。

II 死の想い

死の想い(1)―死の恐怖 毎日の新聞には死亡欄があって、死者の名が載っているし、また新聞には毎日殺人事件や事故死の記事も載っている。毎日人の死の報を受け、他人の死について知らされているが、どの死も一つのニュースでしかない。そうした死を自分の死として受け取ることはほとんどない。見知らぬ人の死の報に接して、それを契機にして死の何かについて想いめぐらすことはほとんどない。普通私たちは自分の死について考えないばかりか、自分の死を恐れ、忌まわしいものと考えて、むしろ死については考えないようにしている。

しかしもし重い病にかかり、治療を受けても一向に回復の兆しがないとか、あるいは遭難し到底救助されえなくなった場合など、自分が死に嫌が応にも直面させられる場合に、はじめて死のことを考えることが多い。あるいはその時ですら、人は自分が助かる可能性を求め、生きようとし、死のことを忌まわしいものと考えてしまうのかもしれない。それほど人は死を避け、生に執着して日常生活を送っている。しかし少しでも考えると、人は自分の生が一回限りで、決まって死に到ることに気づくであろう。その意味で一人一人が自分の死を向かえなければならない。他人にとって代わることのできない死、それが各人の死である。そうだとすれば、自分の生にしがみついて、死の想いを避けるのではなく、むしろ死について想いをはせ、そのことによってよりよく生き方に向けて行くべきであろう。

身体としての死についてはすでに述べてきたように、その死は自分の生命活動の停止であり、死によって自分の身体が崩壊し、腐敗し形を失っていくか、あるいは火葬され灰と化しすっかり形を失って、その存在はやがてまったくなくなってしまう。このように身体の消滅のことを考えると、私たちは〈一体死んでしまったらどうなるのか〉という疑問に駆られる。身体の消滅と同様、死と共に私というものがすべて失われてしまうのだろうか。身体の消滅から引き起こされる私の存在への消滅への想いに悩まされるのである。

このように考えると、私自身の存在についての不確かさと死への不安に想いが嫌が応うでも高まってくる。死はいつやって来るのか不確かだが、平均寿命や年齢に関係なくやって来る。死は予知し難く、突然に不意にやって来る。生に付きまとう死に少しでも想いを

めぐらすと、私たちは自分の生に不安を感じ、死後どうなるのか、まったく知ることのできない死におびえてしまうのである。しかしよく考えてみると、私たちはいつも過去を背負い、現在に生き、そして瞬間瞬間未来に向かって生きているが、私たちのどの生も現在にしか成り立っていないのである。生きている限り未来を生きることができない。その未来はいつも不確定なもので、明日に何が起ころ、自分がどうなるのかを分からずに生きている。つまり未来に関して確実にこうなるという保障をもち得ないのが生であろう。死の不確かさと未来の不確かさは論理的には等価である。私たちは未来に期待し、目標を立てて生きているが、生き物として生きることは時間のただなかに生きることであり、未来の予測はおよその予測のことであり、確実な予測はできない。ただ一つ確実に訪れるものは、それは死だということである。

死の想い(2)－イワン・イリッチの死 私たちは大抵の場合死について想いめぐらすことはほとんどしない。私たちの未来について確実に訪れるのは、死だけでしかないのに、私たちは死について考えることに不安を抱き、逃避して生きている。ここでこうした私たちと同じような日常を送り、死との直面を描いた作品に触れたい。

トルストイの『イワン・イリッチの死』という作品についてである。主人公イリッチはこれまで健康で、死について考えたことがなかったが、彼は〈死に行く〉病床に臥して、その時初めて死の想いを巡らした。この作品に描かれている、この死の想いが私たちに死について考える時の恰好の素材となってくれるように思われる。

「私がいなくなったとき、一体どうなるのか。何もない。私がいなくなったとき、一体どこへ行くのか。本当に死ぬのか。嫌だ。死にたくない。」

イリッチは自分にこのように語りかけた。彼はもう自分が死にかけていることを知っている。しかし死に直面し、自分の死に合点がいらず、死の不安と闘わなければならなかった。〈カイウスは人間である。人間は死すべきものである。それゆえカイウスは死すべきものである。〉このような論理学での推論をイリッチは学び、それは正しいものであると信じていた。しかしこのような命題は、カイウスや他人に当てはまるものであり、イリッチにはまったく関係がないと思っていた。人間は死すべきものであるのは当然で、何も不思議なことではないと思っていた。つまりイリッチは自分が〈死に直面〉するまでは、自分にはかわりのないことだと思っていたのだ。

ところが、病床が悪化し体が痩せ衰えて、周りの者がイリッチの死を口にすることが耳に入るようになって、死について想いをめぐらした。彼はまず自分の死を嫌い、何よりも自分が生きることを切望し、これまで同様に楽しく生きることを自分に言い聞かせた。そして彼はこれまで送ってきた自分の生を回顧し始めた。しかし過去を回顧してみると、自分にとって素敵で、楽しかったと思われた過去は、それほど素敵でも楽しかったのでもな

かったし、歳を取るにつれ、良い思い出はなくなって、むしろ自分の人生が虚しく、欺瞞的で、穢らしいようにさえ思えてくるのであった。自分の過去は、それなりに順調で、世間的に言えば素敵な人生を歩んできたように思っていたのだが、それほどなかったし、歳が取ると共に一層生気がなくなり、いまではすっかり生気が失われ、もうやがて死ぬばかりになっている自分に気づいたのであった。

「それでは一体どうしたというのか。こんなことがあるはずではない！人生がこんなに無意味で穢らしく、無意味であるとは、そんなことはあるはずはない。しかしかりにそうだとすると、一体何故私が死ななければならないのか。何故苦しみながら死ななければならないのか。何かが間違っているに違いない。」

このように考え、イリッチは自分の歩んだ人生を反省する。自分の人生を顧みて、特に間違ったことをしてきたとか、罪を犯したともおもわれない。むしろ人として当然なことしか言えない。そして彼は生と死の謎に答を見いだそうとするが、いくら考えても見いださせなかった。

イリッチにとって、死の問題は他人の死についてではなく、自分自身の死についてであった。彼は他人ではなく自分が何故死ななければならないかと、家族にも友人にも理解されることもなく、まったくの孤独のなかで、死の不安と闘うのであった。自分の死に直面し、死を正面からみつめようとするのではなく、死を嫌い、死から逃れようとする。しかし何故生に執着し、何故生きようとするのかと自分に問っていくうちに、彼は自分の辿ってきた生そのものに対する見方がすっかり変わっていることに気づくのであった。彼は死に直面し生の意味を尋ねているうちに、生と死が彼にはまったく謎となってきたのであった。生と死の解き難い謎解きをしようと懸命になるが、答は一向に見いだすことができなかった。イリッチの求めた答は、一般的な答ではなかった。それだから、生と死の問題は、言葉によって理解されるのでも、知性によって理解されるのものではなかった。言葉や知性による理解なら、彼は死に直面するずっと以前から理解できていた。

彼はこうした苦闘の果て、死の不安や恐怖を払いのけることができた。その時、彼の意識から死の問題がなくなっていた。死についての想いが去った時、彼の身体が死が訪れた時でもあった。彼の心には死の代わりに光に満たされた。つまり彼の心が安らかになり、この世の生と死について悩まなくなった。その時イリッチは死を迎えた。

トルストイが語る死の受容はキリスト教信仰の問題と深くかかわっている。しかし死についての不安や恐怖に想い巡らし、生に執着している限り死の問題が見えてこないというトルストイの見方にはキリスト教信仰とはかかわりなく、恐らく私たち人間の問題として優れた理解を示しているようにおもわれる。イリッチの生と死の苦闘があって、はじめてイリッチは生の何か、死の何かを心で理解したのであった。苦悩の多い人生をこのような形で、超えて生きようとしたイリッチの死に何か悟りの境地に到った有り様を見ることが

できよう。トルストイは死を言葉や知性によって理解するのではなく、心で捉えて行くことに死についての真の理解があることを示したのであった。

メメント・モリ ヨーロッパ人が〈死を覚えよ〉という言葉をやすがとして生きてきたことについてすでに述べた。この言葉は、やがて自分にやってくる死について覚えよと促す言葉であり、人が必ず死すべきものであることを他人の問題ではなく、自分の問題として自覚を促す言葉である。

プラトンが『パイドン』において、「愛知（フィロソフィア）を真の意味で行っている者は死の稽古をしている」と述べているように、古来死の意味を問い、そのことによってよりよい生の何かを尋ねたのが、哲学であった。死について考えるのも、たんに身体の死のことを考えるのではなく、よりよく生きるためである。よりよく生きるのは、この世だけではなく、死後の世界においてでもあった。プラトンは魂の不死説を哲学的に基礎付けたのであった。彼によれば、人間の魂は肉体の桎梏から解放されるときであり、それは肉体の死によって始まる。それゆえ、肉体に死によって人間の魂が消滅するのではなく、魂の真の意味での生が始まる。ソクラテスの死もこうした魂の不死観に従っている。プラトンやソクラテスにとって、よりよく生きることは魂において生きることを意味した。彼らに従えば、魂に生きることこそ、人間が目的とすべき生であり、肉体の桎梏を排除し、肉体の汚れを浄めて魂に生きれば、人間は死を経験できるのである。それゆえ、魂に生きることは永遠に生きることであり、そこでは生も死も同じことである。魂に生きる限り、よりよい生を生きることができると言うのである。

このような考え方に従えば、もし肉体の死によって人間の魂も死し、魂の生がなければ、人間はあらゆる手段をもって自分の生に執着することであろう。それは現代の医療のようである。脳死を新たな死の定義に取り入れ、他人の臓器によって延命をはかる姿は、まさにプラトンの指摘している通りである。人々はこの世に執着し、死を厭い、死に恐怖をもって生きるのである。〈肉体の死が人間の生のすべてなのか〉を改めて問うことを私たち現代に生きる者に促しているようである。人が肉体の生だけで生きるのではないことをイワン・イリッチの死が語っている。彼は肉体の死によって、魂の永遠な生を生きたと言えるのである。

確かに人々はこうした魂に従って生きることよりも、本能的に死を避け、死を覚えることを避け、肉体の生に生きることを選ぶ。この様子は『パイドン』にも書かれているが、ここでは同じ主旨のことを書いているパスカルに従って、このようにして生きている日常の人間の有り様を見てみるとしよう。パスカルに従えば、人間には二つの密かな本能がある。一つは遊戯、仕事、騒ぎ、多忙に身を委ね、気晴らしを求めようとする本能である。「人間は死と悲惨さと無知を癒すことができなかったので、幸福にするために、それらに

についてあえて考えないようにした」(『パンセ』B168)と述べているように、人間は虚しさ、悲惨さ、死から眼をそむけ、それらについてあえて考えないように気晴らし(divertissement)を求め、気晴らしになるものなら、なんでも熱中する。遊び、賭事、狩猟、さまざまな社交などに身を委ねるのである。

しかし人間はそうように気晴らしに身を委ねても、人間から虚しさや悲惨さや死がなくなるわけではない。「私たちは仲間と一緒にいることで安んじているのはおかしいことである。仲間たちも私たちと同様惨めであり、無力である。」(『パンセ』B221)パスカルは人間の悲惨さをつぎのように描いている。「ここに幾人かの人が鎖に繋がれているのを想像しよう。みな死刑を宣告されている。そのなかで何人かが毎日他の人たちの目の前で殺されていく。残った人たちは自分たちの運命もその仲間たちと同じであることを悟り、悲しみと絶望とのうちに互いに顔を見合せながら自分の番がくるのを待っている。これが人間の状態を描いた図なのである。」(同B199)

パスカルによると、人間のうちにあるもう一つの本能は、「人間にはまた私たちの最初の本性の偉大な名残であるもう一つの本能があり、それらが彼に対して、幸福は事実安息のうちにしかないのであって、激動のなかにはないということを知らせているのである。」

(同B139)この本能は、人間の魂の奥底にあって、さまざまな障害と闘いながらも人間を安息へ促すのである。しかし人間は、ひとたび安息してしまうと、倦怠が密かに忍び寄り、再び虚しさ、悲惨さ、死の意識が生じ、気晴らしを求め、何かに身をまぎらわすのである。気晴らしがそれらについて考えさせないでくれるし、直視しないでくれるからである。

「このように人間は再び気晴らしに身を委ねて生きる。人間は惨めであるにもかかわらず、「幸福であろうと願い、幸福であることしか願わず、またそう願わずにいられない」「そうするためには、自分が死なないようにしなければならない。しかしそれができないので、死を考えないようにした」(同B169)「私たちの惨めさを慰めてくれるただ一つのは、気を紛らわすことである。しかしこれこそ私たちの惨めさのうちで最大のものである。何故なら、私たちは自分自身について考えるのを妨げ、私たちを知らず知らずに滅びに到らせるものは、まさにそれであるからである」「気を紛らすことは、私たちを楽しませ、知らず知らずのうちに私たちを死に到らせるのである。」(同B171)

人間は気を紛らして生きている現実の姿には決して安らぐことはない。いくら目をおって生きても安らぐことはない。気晴らしの虚妄を見破り、孤独に徹して死と直面して生きない限り人間は安らぐことはない。パスカルは、この安らぎを求め、イエス・キリストの信仰に求めた。この境地は、イリッチが光に安息を見たのと同じであった。それは魂の安らぎに見たのであり、プラトンの説く魂の永遠な生と同質なものであった。

彼はつぎのように述べている。「私たちはイエス・キリストによって私自身を知る。イ

イエス・キリストによってのみ生と死とを知る。」(同B548)「イエス・キリストなしには人間は悪徳と悲惨さのうちにいるほかはない。彼と共にいれば、人間は悪徳と悲惨さから免れる。」(同B486)パスカルのパンセ(思索)は、真の安らぎをイエス・キリストに求め、それによって死の不安から脱し、永遠に生に生きることに向けられていた。このように死の想いは、人間の悲惨さを超えようとする企てであり、私たちの生が有限であり、なおかつ未来を予測できない不確かな生であることに想いを致すなら、こうした肉体の生を超えて生きる魂の生こそ、人間の悲惨さを超えることができると論じたことに理解が及ぶことであろう。メメント・モリは人間の魂の安らぎを求める傾向性を表すものを象徴している言葉であろう。

Ⅲ 死の記録—臨死者の心境

死の瞬間の記録—キューブラー・ロス ここでは人間がどんな心境になって死に直面し、死の不安や恐怖にどのようにかかわっていくのかを臨死者の心の葛藤を追ってみたい。その手がかりの一つにまずキューブラー・ロスが綴る「死の瞬間」の記録について触れてみたい。キューブラー・ロスによれば、臨死の患者が抱く死の恐怖は、大抵の場合〈未知の世界〉への恐怖である。彼はまず恐怖として〈離別、苦痛、苦しみ、仕残した仕事、愛する人たちを残していくこと〉が挙げる。しかしそれは表面的な恐怖であり、意識の深層構造には具体的に表現されない恐怖がある。臨死者の言葉とか振る舞いで示される死の恐怖は、しばしば氷山の一角にたとえられている。死の恐怖は水面のほんの一部であり、重要な部分は水面下に隠れて見えない。キューブラー・ロスによれば、その恐怖はすべて抑制されていて、無意識のなかにある。

多くの臨死者に接し、多くの患者の死を見守ってきたロスでさえも、死を自分の死としてなかなか受け取り難いことを素直に告白している。「私自身、自分の死をどう思っているのか、自分の死を観想することはきわめて難しい。死はあなたに起こる。あなたに起こるが自分自身には起こらないと人は信じている。」ロスに従えば、人は初めて死が自分に関わっているという観念に陥ると動揺は激しいものとなる。たとえば、〈癌だ〉と知らされた場合に、その人の癌が早期に発見され、治療の可能性があっても、人は自分に襲いかかる破局的なものに関連させて受け取り、無力感、絶望感が必ず付きまとうことをロスは指摘している。癌であると聞いて、動揺した後で、つぎに人はその診断が間違っていると願う。それで病院を替えたり、再検査をしても診断に間違いがないことが証明され、そして疾患がまだ初期の段階で治療可能だと言われると、その段階で人は治療を望み、命を長らえることを希望する。このように治療可能な人を襲う死への不安と恐怖は、体験者でな分けなければならないような体験であり、体験者自身が自分の体験を表現しきれないでいる。

人は末期癌であると知らされたとき、その動揺は一層激しいとされている。

キューブラー・ロスは臨死患者に接した体験から、その共通の特性を探り、それを五つの段階に分けている。

一つは末期的疾患となるかも知れないと事態を知らされた段階で、患者はショックを受け、それを否定する。〈No, not me〉〔否認と隔離の段階〕と言われる段階である。ロスに従えば、殆どの人が、そうしたことは私に起こる筈はない。あなたに起こるかも知れないが、自分には起こらないという反応を示すというのである。そして医師の言うことを否認し、自分の仕事に戻り、何か重大なことが自分の身にふりかかっていない振りをする。あるいは病院から病院へと通い、病気ではないと言ってくれる医師を懸命になって探しまわす。否認を辞めるようになるのは、大抵の場合深夜のことで部屋が薄暗く、静寂で、孤独になったとき、ようやく病状を認めようという気持ちになる。否認段階における患者の死の恐怖についての葛藤の激しさが認められるというのである。

この段階を通り抜けると、〈Why me〉の段階と名付ける〔怒りの段階〕へと移る。今度は何故私がこんな状態にならないかならなければならぬのか、という非難、苦悩、怒り、憤りの感情が彼の振る舞いに現れてくる。そして自分のまわりの者に怒りをぶつける。この段階を過ぎると、〈But〉の段階つまり〔取引の段階〕へと移る。神へもうしばらく生かして下さい、よきクリスチャンになりますとか、私の眼と腎臓を献体しますと言って、命を延ばして貰おうとする。自分の残した仕事を終わらすために延命を希望し、そして家のなかを整理整頓し、言い残すこと、遺言、あるいは家族の将来のことなどに関心を向ける。

この段階が終えると〈But〉とは言わず、〈Yes, me〉という〔抑鬱の段階〕になる。この段階は、抑鬱の状態、ひどい悲しみの感情に陥る段階である。これは最後の段階に入る前に退行の起こる段階である。そして最終の段階で〔受容の段階〕と言われるものである。残してきた仕事も片づき治療や延命の希望をもつことなく、穏やかな安らぎの状態にある。死を待つ状態で、諦めの状態とは区別される。諦めの状態は敗北の感情で、悔しさとかどうなってもいいという自己放棄の感情になっている。それに対してこの状態は、病との闘いが終わった状態で、静かな状態で、自分の終焉を見守ることのできる状態である（以上『死ぬ瞬間』から）。

キューブラー・ロスは、『死ぬ瞬間』においてこの受容の段階を「自分の〈運命〉について抑鬱も怒りも覚えない状態と呼んでいるが、その状態は、「疲れ切り、ほとんどの場合衰弱しきっている」「まどろむ必要があり、頻繁に短い間隔において眠らなければならない」「抑鬱のときの睡眠欲求とは異なる睡眠であり」「痛み、不快などを忘れるための休息ではない状態で」「痛みが去り、闘争が終わり、〈長い旅路の前の最後の休息〉のための時が来たかのようなのである。」（『死ぬ瞬間の対話』から）

以上は臨床医キューブラー・ロスが臨死の患者を長年にわたって見てきた体験に基づい

て、患者の死を迎える状況を綴ったものである。彼女に従えば、現実死に直面したとき、人々がとった態度は上述したように、主として五つの段階に当てはまるというのである。彼女の記録から、〈死に行く患者〉の心理状態は、フィリップ・アリエスが「トルストイと最近の病院での死の分析との類似に驚かされずにいられない」（『死の歴史』259）という表現に見られるように、既に辿ったトルストイの『イワン・イリッチの死』に描かれているイリッチの死に対する意識の変化に対応しており、しかもそれはほぼ同じ過程を辿っていることに気づくのである。

IV 死の記録－遺書

死の声(1)－遺書 キューブラー・ロスの記録した〈死に行く〉過程は死に向かうにあたり、末期患者の辿る過程を記録して、およそ五つの段階に分類したものは、一般的な死に対して辿った死の受容に対して心理的な変遷を理解するうえでの貴重な参考となろう。しかしこれを死の受容の一般的な五つのパターンとして、そのまま認めることには問題があろう。基本的には人それぞれに特有な死に到る過程があるであろうし、誰でもが同じ様な過程を辿るとは限らないことは当然理解しなければならないであろう。サナトロジストで知られ、自殺学 (Suicidology) の創設者でもあるシュナイドマン (Edwin Shneidman) は、「死へ向かう歩み方はこれという決まった型があるわけではない。一人一人がそれぞれの決めできわめて個性的な死に方をする」（同書156）と述べているように、死は自明にも個人の死であり、一人一人が個性的であるように死に行く過程も個性的であることが強調されなければならない。

ここで、死に向かう本人たちの心境の何かを知るために本人たちが書き残した遺書についてシュナイドマンに従って見てみたい。

「死に直面して遺書を残そうとする人々のなかには、自分が何故死を選ぶに到ったのかについて、自分が体験した難事や落とし穴などを死後残された人々に伝えたいと願って遺書を書く場合がある」「私たちは遺書によって日頃見ることの許されていない、心の秘密を見ることができる。そこには衝撃的な人間のドラマがある」「死を前にして書かれた日記、手紙、メモに記された記録は、愛、性、遠い時代、近い将来、自分の死など切に知りたと思う人間存在の特別な秘事へ導いてくれる」（同7）。つまり死を前にした本人たちの心に去来したものを記す記録は、死の何かへの解明への糸口を与えてくれよう。

死の声(2)－自殺 死を大別したら、自然死、病死、自殺、他殺、処刑死、事故死などに分けることができよう。まず自殺を取り上げてみたい。

シュナイドマンによれば、自殺には三つの要因に分けられる。一つに〈生活の乱れ〉に

よるものである。自分の為にならないことをし、自分の幸福への道を閉ざし、人に反感をもたれることを敢えてし、自分の人生を破滅へと導き、他人に対してだけではなく、自分自身に対して敵意を抱いて行為することが要因になる場合である。その一例として酒飲み、職場での衝突、麻薬中毒、家庭生活の乱れ、対人関係における問題処理のまずさなどがあげられる。第二の要因として〈狼狽〉が挙げられる。これは取り乱した状態で、平素の落ち着きをすっかり失ってしまった精神状態にある。著しい不安、心配、落胆、動揺に陥っている。八方ふさがりで、誰からも拒否され、苦しむばかりで、希望もなく救いもないという思いになっている状態で、自分の内部に閉じ込められるか取り乱した状態になっていて、罪悪感、恐れ、恥、懷疑、戸惑いなどの感情に支配されている状態にある。第三の要因は、〈収斂〉である。ものの認識、考え方、選択に際して、偏った状態にあって、普段の考え方とか、見方、人を愛する気持ち、責任感が突如として意識から欠落してしまい、そうした自分の状態に耐えられなくなり、そこから逃げ出す方法はたった一つということに集中する。そして自分の苦悩を救済してくれるものへとひたすら向かう（同13-14）。これらの三つの要因が絡み合って自殺へと導かれる。「切羽詰まった敵性志向（生活の乱れ）、狼狽、収斂現象というきわめて危険な混合物を爆発させる起爆となるのは、永遠の眠りであり、苦しみからの解放であるという思いが意識を支配する。このような状態を解決するのが死である。そこに自殺行為が始まる。」（同15）

シュナイドマンに従えば、自殺者のうち遺書を残していく者の割合は、15パーセントから30パーセントである。遺書を残す者と残さない者との間には、年齢、性別、精神病の既往など、その他のことを含めてまったく差が認められない。また自殺者は自殺を企てない者と較べて二分法的思をする傾向がある。たとえば、完全か無か、生か死というように互いに排除しあう二つのグループに物ごとを分ける性向がある。そして思考の幅がきわめて狭く、ある一点に凝縮している。さらに自殺者は、自分の思考法そのものを反省してみるなどの知的な操作を避ける傾向があり、合理的な思考よりも、生の感情で物ごとを処理する。そして好んで他人や自分を非難し、他人に対しては敵意を示し、自分に対しては罪や恥を感じる。また愛に関心を寄せ、愛のさまざまな様相に思いに耽る。

シュナイドマンに従えば、自殺者は知的にも感情的にも平常心を失って心が乱れた状態にある。「心が乱れれば、さまざまな形を取り、報いらなかった恋、知的に自己主張し、汚名につながる恥と罪、狂気な苦悩から逃れたいと願い、愛する人をこれ以上苦しめたくない願い、自分の運命と死について内心のプライドとそれらを自分の手中にしたいと願うなど、さまざまな形をとる。」（同56-57）シュナイドマンは自殺の原因となっている多くの遺書を引き合いにしている。彼に従えば、自殺の原因の一つは、〈憎しみ〉の感情である。〈自殺者は他人の死を願って死ぬ〉と言われるように、〈憎しみ〉を自殺の大きな原因に上げている。それと双璧なのは、〈実の結ばれない愛〉とされる。〈お別れいた

します。でも愛しています」という手紙を綴り、死を選択する者が使う〈愛〉という言葉には、〈悲しみ、後悔、非難、優しさ、ノスタルジア、裏切られた感情、約束の破棄などに対する、やり場のなさや救いのなさなど、これらすべての感情〉が込められている。また自殺者によっては、〈恥、汚名、面目を失う出来事、義務を果たすことのできなかったことに対する自責の念から死を選ぶ。〉恥の思いに不安、怒り、抑鬱、助けのなさ、罪や拒絶などが加わって、平常心を失った結果自殺を選ぶと言うのである。

自殺の遺書には、さまざまなことが書かれており、いま挙げた他に、精神の病に冒されて、〈狂気が迫ってくるといった絶望感によって否定的な感情に陥り、死を選ぶ。〉そんな場合に〈自分が愛していたり、愛してくれた人に対する思いやりや感謝の念を遺書〉に記した例がある。また〈自分の存在に価値を見いだすことなく生きてきた者がまわりの者からまったく拒否されたと感じるとき、そのことが自殺の深い動機となっている〉〈その遺書は、不幸な星のもとに生まれたという思いにかられ、虚無感と無価値観に充ちている〉という例など、多数の例が紹介されている。

『残酷な神』の著者である、現代英国の詩人、作家、評論家であるアルバレフ (A. Alvarez) は、その著書において「人は一度自分の命を絶とうと決意するとき、周りの者のいかなる説得にも応じない難攻不落の閉じた世界に入る。そこでは、すべてのことが死という方向に流れを合わせ、あらゆる出来事が死の決意を一層強くする役割を果たす。…どんな自殺を見ても、そこには当人にとってのもっともな論理と再現不可能なほど深い絶望がある自殺は、視野の狭い人間が自分の手で作り出す、不自然で緊張感に溢れた必然性に対する恐ろしいが、まったく自然な反応である」と書いている。さらにロシアの作家パステルナークは、「死を決意した人は、自己の存在を完全に放棄しようとする。過去に背を向け、人間として破産したことを告げ、自分の記録が不確かなものになったと宣告する。誰もこの人を助けることも救うこともできない。他人の手の届かないところに身をおいてしまったからである。内的世界の連続性は断たれ、人格と呼ぶべきものは終わりを迎える。自殺を最終的に決定させるものは、決心の強さではなく、すでに生きることを止め、感覚できない存在となったゆえに、虚しさ、悲しさ、実りなさに耐え難くなったからであろう」と述べている。

シュナイドマンの自殺についての結論はつぎのようである。「自殺を図ろうとする者の行動は、自分の意志によるものであり、その心は極度のノイローゼ状態のなかで愛と憎しみ、生と死の両極端を揺れ動く。そこには絶望感と神経症の要素が見られる。〈死を選んだのにも理由がある〉と自殺の状況を知った周りの者たちが感想をもつのはこの二つの要素の働きによる。自殺者はいつも苦しい思いに責められていて、耐えることのできない苦しみから逃れたいと願っていたのである。」(同106-107) 自殺を心理的に解明することは大変で、恐らく各人各様な自殺の要因が挙げられよう。しかしシュナイドマンが挙げた

これらの要因はたいへん貴重である。多くの自殺に共通する動機が挙げられている。

死の声(3)―刑死者の記録 シュナイドマンによれば、死を前にした死刑者の心理は自殺者の心理とは対照的である。「処刑の時が迫っているという異常な強迫状況におかれるとき、人は自分のエネルギーを分散させるさまざまな想いから遠ざかり、もてる精神のエネルギーを一点に集中させる。ささやかな情緒に溺れている時間をもたない。投獄され、少なくともしばらくは命を長らえるであろうが、その先には死刑という生の難関が待ち受けている。生きる望みはすべて断たれている。この時初めて人間は自分に関する不安を乗り越えることができる」「その静かさのなかで、日常的な思い煩いや望みや思考から解放される」「このような日常性から解放されるとき、ほんのひとときではあるが、自分について思い煩いのない状態になる。そうやって初めて人間は、神経を疲れさせる生の装飾物を脱ぎ捨て、このうえもなく円熟し、他人に対する思いやりに満ち、気品に満ちた最後の手紙を書くことができる」「刑死を前にして書かれた記録は、その明晰さ、愛する者に対する思いの深さ、心の平安などの点において類希な心理記録である。」(同107-108)

「死を前にして人は自分自身について深く考える。自分の生きているこの世界を思い、自分の死後の世界に想いををせ、そして嘆き悲しむ。つまり自己哀悼と呼ばれる状態になる。」(同108) エリザベス女王暗殺計画に巻き込まれ、その計画が発覚し逮捕され、死刑を宣告された若者の死が残されている。

「わが青春の盛りにはただの気苦労の霜
わが喜びの宴にはただ苦しみという名の料理
わが麦の収穫の時にはただ一面の毒麦
良きものはすべて虚しい望みと果て
日はめぐりゆきても太陽の影はなく
いま生きながらが生は終わりぬ
わが物語は人々の耳に届くとも口に上ることなく
わが果実の地に落ちる時わが葉はなおも青い
わが青春は去りぬ、されどわれはいまだ若く
われは世界を見るがわれに目をやる世界はない
わが糸は断たれたが、織り上げられることもなく
いま生きながらわが生は終わりぬ」(同109-110)

刑死者は、死を前にして決して取り乱すこともなく自分の想いを、知的創造の営みへと結集し、自分の感情を思慮にとんだ哲学的思考へと転化させ、逃れることのできない自分の死にさいして自分を律し、定められた運命を受け入れ、自分の若き生の終わりの嘆きをこの詩において表現している。

つぎの手紙は反ヒトラーの立場を鮮明にして、処刑されたあるドイツ政府の高官が妻に送った手紙である。「あなたと共に歩んだ美しい、豊かな人生の終点について辿りついたようです。明日私たちに判決を下そうとしています。しかし彼らは私たちの上着を取り去ることはできても、私たちの行動の基盤である精神を奪うことはできません。私の詩は外見的には栄光とは無縁であるばかりか、恥辱的でさえあります。しかし私は最後のこの小道を屈することなく進みます。」その他に、不当な罪をおわせられて死の威嚇にたたされても、その悲運に耐えて自分をしっかりと支え、愛する者のために祈り、自分への愛を乞い、安らかな気持ちになって死を迎えようとしている有り様が遺書（手紙）に記されている。ある刑死者の手紙に典型的に表現されている。

「私のなかで何かが生き、燃えています。それを愛、あるいは靈感と呼んだらいいのか。それにふさわしい呼び名がまだ見つかりません。私はいま死のうとしています、私の死を超えて生きる小さな光を誰かの心に灯したことがあったのだろうか。死を迎えるいま自分の心に尋ねて見るのは誠ですが、私の心は落ち着いています。私の魂の奥なる人よ、頭を上げまわりをごらん下さい。海の青さはいまま変わらない。私があれほど愛した海、私たちを包んでくれたあの海。二人の為に生き続けてください。すべての悲しみはやがて幸福に転じます。（同126）

シュナイドマンが記している刑死者の記録は政治犯であり、殺人犯とかその他の犯罪者については取り扱っていない。ただ一言つぎのような記述がある。「このような時（死刑の時）、消え去ることのない恥辱を感じるのは、人が死刑に値する犯罪を犯したときである」（同146）。それはともあれ、死刑の時の迫り、恐ろしい状況のなかで書かれた手紙のなかに、人間の魂が到達し得る気品の高さを示しているものが多い。死を敢えて受け、ここには死を厭うような叫びはない。何か崇高な気持ちすら感じさせるものが多い。

死の声ー哀悼 死の悲しみ、これが哀悼である。シュナイドマンによれば、哀悼には自分が死に直面し悲しみ（自己哀悼）と自分以外の者の死が避けられないときの悲しみ（前哀悼）と、そして自分が愛し頼りにしてきた人が死んでしまい悲しみにくれる行為（哀悼それ自身）とに分かれる（同200-201）。

自己哀悼は、死に直面した人の死後に自分が無に帰することの嘆き悲しみである。自分の死を前にして、死に取り組み自分を既に亡き者として嘆き悲しむ場合である。この場合には、自分を悲しむ心にはさまざまな想念との葛藤がある。何故この私が死ななければならないのかという想念に駆られ、しかも他方では人は死ななければならないものであるという生き物の必然の定め認識もある。そして自分の悲しみを他人とは分かち合えないという感情が一層自己哀悼を切ないものとする。

前哀悼は迫りくる他人の死を悼むことである。それは自分と親しい人、愛している人が

死に行く状態に置かれているときに、見守っているときに抱く感情である。それは親しい人、愛している人とが喪失してしまうという感情と自分が取り残され捨てられてしまうという悲しみの感情である。それには言い難い虚無感、喪失感、絶望感や時には罪悪感や怒りの感情を伴う。しかし愛する人の死が避けられないことが、たとえば看病している間に次第に分かってくると、やがて自分の生を自分で耐えなければならないという意識へと変わっていく。このような意識になったとしても、実際に親しい人、愛している人が亡くなると、私たちは言い知れぬ悲しみに陥るのが普通である。二度と帰らぬ人の生還を願い、抑え難い切なる思いにかられ、泣き濡れてしまう。シュナイドマンは「人間の経験することで哀悼ほど深い経験はない。人間は自分の死を認識することはできない。しかし他人の死を経験することはできる。他人の死を経験して虚無感に襲われ、喪失感を覚え、恐怖にとらわれ、途方に暮れる思いをする」「愛する人を失った悲しみは子供であれ大人であれ荒れすさぶにまかせる」（同257）と述べている。しかしそのような悲しみのなかに人は自分のなかで最も人間的な何かを見いだすのである。それは人と人との共同の、あるいは個人的な愛の交わりであり、人は愛の交わりを欲し、それを実現しようとしている。愛する人の死に涙を流し、愛する人の思い出をもちつづけることこそ最も人間らしい生き方でもあろう。

死の遺書には、自分の死であろうと他人の死であろうと、死に直面したときの深い悲しみと嘆きが語られている。この嘆き悲しみから自分の弱さ、人間の弱さを体験し、人間の何かを根本から知る契機となるのである。そして死という挫折を通して、さまざまに葛藤し、その葛藤からやがて解放され、最終的に平安を見いだして、死に行く有り様が記されている。「死のもたらす平安のことを考えようとするのは自分に不満を抱き、日々の生活に満ち足りず、自分の内心の葛藤の疲れ果てた人々である。しかし一途に死を望んでいるように見えても、実はそうではない場合がある。死のもたらす平安を乞う場合にも、その平安は挫折という代償の上に成り立っている」（同265-266）と英国の精神科医ジョン・ヒントンの語っている。このように私たちはこの平安が激しい心の葛藤のうえに成り立っていることを承知しなければならないであろう。

心の平安には宗教や信仰の果たす役割は大きい。ある死刑囚に「信仰だけがこの世の牢獄とその恐るべき力に対して勝利を与えます」（同270）という手紙があるが、シュナイドマンの著書『死の声』にだけでなく、信仰に自分を投影することによって、心に平安を与えられて〈死に行く〉姿のさまざまな死の記録に記されている。キューブラー・ロスの『死の瞬間』のシリーズもその一つで、そこにも信仰に入って安らかな心になり〈死に行く〉末期患者の姿が多く記録されている。またこうした信仰は既成の宗教だけではない。特定の宗教の信者でもない人々にも自分の信念のなかに支えられているものをもつ。死の遺書は、自分が愛する者に語りかけ、その愛の絆に平安を求めて死を受容して行くことを

綴るものが圧倒的に多い。また特定の宗教の信者たちも信仰に平安を見ず場合には、神の愛に信仰を託している。こうして見ると人が生きる支えとなっている最も根源的なものは愛であると言える。このことが死の遺書にはほとんど例外なく記されている。シュナイドマンが綴る『死の声』には、長年サナロジストとしての体験に基づいて、過去からの遺書を整理し、〈死に行く〉人々の記録が綴られているが、彼は自分の仕事を振り返り、そうしたのは自分自身の〈より良き死〉と〈より良き生〉に向けてと結んでいるように、私たちが死について考えるのも、結局シュナイドマンのこの言葉に尽きるようである。

V 一人称の死と生の思索

二人称の死 死の受け入れ方について三つの受け入れ方がある。それは私の死、つまり一人称の死、私が親しくしている人たちの死、つまり二人称の死、そしてそれ以外の死つまり三人称の死である。

他人の死について、受け入れることは特殊な事例を除いて容易である。しかしキューブラー・ロスやシュナイドマンで見てきたように自分が死すことになるという告知を受けるほどショックを受けるものはない。そして死は毎日私たちのまわりに起こっているが、さしあたって死について何かの想いに駆られるのは、自分の死よりも自分と親しかった人の死に接してであろう。自分を育ててくれた親の死、友人、愛した人の死など、自分と慣れ親しんでいた人の死は、私たちの何かについての省察をもたらしてくれる。つまりかけがえない肉親の死、自分と共に生きることを期待していた友人とか、愛する人の死は、他人の死とは違って、死を自分の問題として考える機会を与えるのである。

二人称の死は自分の死ではないが、それでも二人称の死は、他の人と取り替えがきく代理可能な死ではない。私を生み、育ててくれた両親は決して取り替えがきくようなものではないし、私にとって友人の死も愛する人の死も同様に代理不可能な死である。多くの悲劇は、自分にとってかけがいのない人の死によって生きる意欲を失い、悲しみのあまり、その人を喪失したことでそれに代わる生の価値を見いだすことができないと考えて、死を選択したことを描いている。二人称の死は、自分の死ではないが、自分の問題としてその死として受け取る契機となる。

しかし二人称の死は、それにもかかわらず自分の死ではない。私たちは二人称の死を哀悼し衝撃を受ける。しかしそれは自分の死ではない。たとえ死と同様な悲嘆にくれた生であっても、生きている限り私たちは死んでいない。その場合であっても、死者とは違って生きている。生きている限り私たちは死者がどうなっているのかを知ることはできない。現実の死者の物理的状態についてはどうなるのかは知ることはできるが、死者たちの世界があるのかどうかは知り得ない。ただつぎのことは言える。死者が私たちの前から物理的

に姿を消してしまったからといって、彼が私たちの脳裏から消え去るのではないということについてである。追憶のなかで彼らはいつも蘇ってくるからである。そして脳裏において彼らと話し合うことすらできるからである。その意味では心のなかで、彼らは生きているとさえ言える。このように死者たちとつながりを持続けるのは一体どうしてなのか。生きている限り、心の世界では彼らを忘れずに交わることができる。こうした交わりの事実から、さまざまなイマジナリーな想いの世界が開かれてくるのである。

さまざまな宗教が示しているように、果たして死後の世界があるのか。あるとすれば、どんな世界かという想いに駆られる。しかし私たちが自分の両眼で見ることのできるものは現実のさまざまな事象に限られており、したがって私たちは死者の世界を知ることもしないでいる。それにもかかわらず、私たちは二人称の死の体験によって、死のことや死の世界のことなどの想いに耽る契機が与えられる。

一人称の死 自分の死ほど私たちを惑わすものはない。自分がこの世で死するとき、自分で自分の死を見ることも知ることもできない。そして死後家族、友人知人などのまわりの人々が自分に死についてどう処置しているのかも知ることもできない。このような、いろいろな疑問が生きている限りつぎつぎと生じる。何よりも自分の死によって、この世の事象のすべての理解が一切たれてしまうという不安がまず先立つ。まさにイワン・イリッチのように、さまざまな想念に悩まされる。〈自分の身体の死と共に一切のことが本当に消滅してしまうのか〉〈私が死んでも、私がこの世で生きてきたさまざまな軌跡は、人々の記憶に残り、私についての何かが生き続けるのではないか〉〈しかし時の経緯と共にその記憶も次第に色あせていき、やがてすっかり消えてしまうのではないか〉などの想いに耽ったり、また知ることもできない〈死の世界〉のことなどに想いをはせる。

自分にとって死とは一体何か、この想いこそあまりにも漠然とし、あまりにも未知で謎目めいて、これほど途方に暮れる想いはないではないか。この死の想いに何らかの解決を与えるすべを一体何処に手がかりを求めるべきか。

死の存在—ハイデガー ハイデガーは、『存在と時間』において他人のとか、人一般の死ではなく、自分自身の死の問題を論じている。彼は他人の死の分析を通して死を論ずるのではなく、各人が私として生き、その生は他人がとって代わるることのできない一回限りの生であり、その生を受けた人間が死することの問題に死の問題をみたのであった。つまり私の死であり、一人称の死を論じたのであった。「死ぬこと（Sterben）は、それぞれの現存在（人間）がその都度自分で引き受けなければならないものである。死（Tod）はその都度私のものなのである。しかも死は、一つの特有な存在可能性を意味しており、それによってその都度自分に固有な現存在（人間）の存在へとひたすら関わっていくことが問

題である。」（『存在と時間』）

ハイデガーによれば、この世に存在しているもの、あるいはこの世の出来事は代理可能で、取って代わり得るものであるが、死はそれとは違って代理不可能なものであり、各人がそれぞれ自分の死を引き受けなければならない。人間はこの世に投げ出され、現（da）に存在し、その自分の存在に関心を向け気を遣い、自分の存在の在り方を自分で決定していかなければならない存在である。〈実存〉とは、現存在が自分の態度を引き受けて存在することである。人間はその都度私のものとして各自がそれぞれ自分の〈実存〉に関わって存在しているのである。

死はこうした実存ができなくなってしまう可能性のことである。「誰もが彼の死を引き取って取り除いてやることができない。」（同240）死は代理不可能なのである。死は各人がそれぞれ自分で引き受けなければならない。その意味で死は本質的にいつも〈私のもの〉としての死である。しかし私たちは生きている限り自分の死を体験できない。そればかりか、他人の死については生物学的に死を理解できるが、つまり身体の死を観察できるが、私たちは他人の死すら理解できないし、他人のなかで何が起きているのかをまったく知りようがない。私たちは他人の死を前にして「せいぜいその場に居合わせるにすぎない」（同239）。このようにして私たちは自分の死ばかりか、他人の死についても何も知り得ないでいる。何も知らないのにもかかわらず、そしていつ来るのかも分からないのにもかかわらず、死は必ずやってくる。死は私の生誕と共に与えられ、生きている限り、すでに死の可能性のうちに投げ入れられている。」（同251）それだから、私たちは死について恐れ、不安を覚える。

私たちは「死は不断に起こっている出来事として、〈死亡事例〉として〈承知〉されている。」（同252）隣人であれ、まったく見知らぬ人であれ、死はこの世に常に起こっている当たり前の出来事として承認されている。私たちは〈人はいつか死ぬもの〉と了解し毎日の生活を送り、他人の死を人一般の死としか受け取っていない。〈人は死ぬものであり、自分もいつか確実に死ぬ〉と思っているが、大抵の場合自分は「さしあたって死なない」（同258）と考えている。私たちの日常において死はどのように他人事として本質的に代理不可能なこととして私のことであるのに、広く世間一般に起こっている世の出来事へと転倒されてしまっている。」（253）私たちは日常において死を自分自身の問題として「確実に受け取ることを回避している。」（258）そして死の到来は不定で、いつやってくるのかを知らない。それゆえ〈さしあたって自分は死なない〉と考えて、自分の死の時点を保ち延ばし、そのことによって死の確実性を曖昧にし、死を回避している。

しかし「現存在は、命を失わない限り、自分の死に関わって存在し、事実として、しかも不断に死に臨んでいる。」（259）つまり人間は終わりに関わって生きており、自分の実存の可能性を不可能になることは避けられない。私たちは死に対して非力で、無力であ

る。この無力のただなかで自分の実存がある。その実存の可能性を拒み、否定し、無とするのが死である。死の想いは、自分の実存の不可能性を凝視することである。自分の死と関わって生きていることを自覚して生きることに、人間の本来的な生がある。

このような死への関わり方をハイデガーは、〈死への先駆〉と呼んでいる。それは死の可能性を可能性として了解し耐えることである。そしてそのことによって私たちは自分の最も固有の存在可能性に立ち向かい、本来的に生きることができるとハイデガーは主張している。

ハイデガーが指摘しているように、私たちは自分の死を〈さしあたって〉こないとして忘れ、あれやこれやのことに追われ忙しく過ごしている。しかしそのような日常にあって、死の重みに対抗できるだけのことをしているわけではない。自分の死に直面したとき、私たちははじめて自分のしてきたことに虚しさを覚えるのが常である。こうしたことはこれまで、多くの作家、詩人、あるいは哲学者たちによって数多く語られてきている。そこで語られていることは、死が実にそれぞれの生を写し出す鏡のような役割を果たしているということである。こうした先人たちの教えに耳を傾け、死という鏡に照らし合わせて自分の生を生き抜くことが大切なことであろう。

VI 死の準備と生きることへの省察

モンテーニュの死の随想 死についてのまとめとしてモンテーニュの『随想録』を手がかりとして死についての省察と死へ準備への覚悟について考えてみたい。

モンテーニュは、キケロの「哲学することは死に備えることに他ならない」という言葉を引き合いにして、死について語っている。モンテーニュに従えば、哲学することは結局死の何かを理解することに向けられている。哲学することによって、人は死の意味を理解し、そのことによって生の苦悩や悲哀を乗り越えて、自由な境地に生きることができる。それゆえ、死の何かを理解することはより良く生きることとなる。

死の何かについての了解のためには、まずもって死の不可避性とその不意性について了解しなければならないであろう。モンテーニュは「私たちの旅路の目的（終点）は死である。これは私たちが必ず目指さざるを得ない目標である」と語り、死は生の不可避的な終点であり、どんなにしても防ぐことができないと語る。〈いくら用心して黒鉄青銅に身を鎧うとも、死はまんまと首級をその下から奪い去る。〉（プロペルテウス）しかも死はいつ来るなどの手紙はない。死は突如として不意にやってくる。どんなに命を長らえようとしても、その努力は虚しい。どんなに医学が発達しようと、医学は人間を不死にすることはできない。生老病死は生き物の定めである。死は生き物の目指す目標である。この目標を他の目標に変えることはできないし、この目標への到達の時期は、人知によって予知

され得ない。死は毎日の生活にはらみ、突如として訪れる。

それだからと言って、毎日毎日の死の不安におびえることはない。死はいつ来るのか不確かであるが、死を恐れず、死を待てばよい。〈明日をお前の最後の日だと思え、そうすれば思わざる今日を儲けて喜ぶであろう。〉(ホラティウス)。「何処で死が私たちを待っているのか分からない。それだから私たちは到るところで死を待とうではないか。」すでに見てきたように、死を告知された末期患者や死の想いに悩む自殺者などは、死に直面して筆舌に尽くし難いほどの恐怖との葛藤をしている。

モンテーニュは、こうした死の不安や恐怖からの解放の必要性を説く。そのために毎日の生活に死を待つことを促す。それが死の準備である。「死の準備は自由の準備となる。」〈死の準備〉によって自分の何かをわきまえ、この世を自由に生きることができている。「死ぬ覚悟のできた者は人に屈従しなくなる。如何に死すべきかを知れば、私たちはあらゆる隷属と拘束とから解放される。」

死の不安や恐怖を取り除くために、モンテーニュは、生が死のただなかにあり、生きることが死に近づくことであり、死の建設であることを説き、逆説的な在り方で死を促すのである。「人は生きれば生きるだけ、自分の生を減らすのだ。人の命の不断の営みは、死の建設なのである」「お前たちは、生のなかにある限り、死のなかにある。まったくお前たちが生のなかにいるとき、お前たちはすでに死の背後にいるからである」「あるいはお望みとあれば、お前たちは生きてから後に死ぬことにしてよい。その代わり生きている間中お前たちは瀕死人である。そして死は、死人に対してよりも瀕死人に対して一層ひどくぶつかり一層本気でぶつかる。」

モンテーニュはつぎの論法で死を促す、「もし人が生から利益を受けたなら、もうそれに飽きている筈で、満足して立ち去るがよい」「もし生に利益を受けることができなかったら、つまり無益であったなら、それを失うことが何であろうか。さらに長らえたとしてもどうしようというのか」「人の為に毎日をさらに重ねようとするのか。明日も昨日のように虚しく消えるだろうに。」(ルクレティウス)モンテーニュは、ただたんに生に執着し、無益に生きることを鋭く批判し、「生はそれ自体善でも悪でもない。それは個人次第で、善の舞台にも悪の舞台ともなる。」生がそれ自体において決して良きものではないこと、生を良きものとするのは、個人の生き方による。それでもそもそも生に人は何を期待するのか。人は「一日生きたら全てを見たのだ。一日はもろもろの日に等しい。」それが嫌なら、「いくらでも長生きせよ。数百歳までも。だが死は永遠なのだ。」(ルクレティウス)「命は何処で終わっても、それは全部なのだ」「生の利益は、その長さにあるのではなく、その用い方にあるのだ。人は十分に生きたかどうかは、その人の意志にある。年数にない」「生きていようと死んでしまおうとお前たちには関係がない。生きていれば、お前たちはあるのであり、死んでしまえば、お前たちはもはやいないのだからである。」し

たがって、死の何かを知って、死の覚悟をすることである。死は恐怖ではない。「人は後へ引き返すことができないのに何故尻込みをするのか。死んでさまざまな不幸から免れ、幸せになった人たちを十分に見たはずだ。死んで不幸になった者を一人でもみたか。」

哲学者ウィトゲンシュタインも死について思索した。彼は「死を前にした恐れは誤った悪しき生の最良のしるしである」と述べている。そして彼は自分の父親の死にさいして、「臨終に立ち合っている間、一瞬とも悲しいとは感じませんでした。むしろ最高に喜びを感じました」（ラッセル宛の書簡）と述べているが、それは彼が父親の死に永遠の生を見たからであった。すでに述べたようにトルストイも死に永遠の生をみた。死は生のはかなさ、短さに較べれば永遠の生と見たのであった。

このように死に悲しみや不幸があるのではなく、永遠の安らぎと幸福があると言われているのにもかかわらず、そしてそのことを聞かされたとしても、人はなお死に不安や恐怖を抱くのである。それは一体何処に原因があるのか。それについてモンテーニュは応える。それは死そのものに対する恐怖にあるのではないと述べ、「死を取り巻く、あの恐ろしげな顔つきや道具立てこそ、死そのもの以上に私たちを恐がらせるからだ。」人の死にさいして、青ざめ泣き声をあげる家族の姿、驚き慌て駆けつける人々の弔問の有様、火影のゆらめく蠟燭、医師や僧侶に取り囲まれた枕元など、すべてが日常と変わってしまって、こうした異常な状況が死の恐怖を呼ぶと言うのである。しかしこれは死そのものの恐怖ではない。「私たちはそういうもののしい支度をする暇がなく、死ねたらどんなに幸福であろうか」とモンテーニュは語っている。

こうした心境になること、それは私たち常人には容易なことではない。しかし優れた人たちはそれができた。たとえばソクラテスがそうであって、ソクラテスは、平然とした態度で死と交わり、死と慣れ親しみ、死に臨んだ。彼は死刑の宣告を受けたが、死を喜びとしてさえ毅然として死に臨んだ。モンテーニュはソクラテスの態度に〈美しさ〉さえ感じると言っている。しかしすでに述べてきたトルストイのイリッチやキューブラー・ロスの臨死者の態度のように、死と葛藤して、そして死を受容して死に臨んだ人々の心境には、ソクラテス的な何か共通したものがある。死へ旅路に安らかな気持ちになっておもむいていったのだった。

カエサルがどんな死が望ましいかと問われ、〈最も思いがけない最も短い死〉と応えたように、モンテーニュも〈短い死は生の最高の幸福である〉（プリニウス）という句を引き合いにして一日も早い死が望ましいと語っている。また〈それでは何故早く死なないのか〉という問いには、〈死を急ぐこともない。自然に従えばいいのだ。生と死もどちらも自然なのだ〉と答えている。そして〈もし生きるのに楽しいことよりも苦しいことが多くなれば、死ぬ時が来たのだ。苦痛や不快に耐えながら命を保つのは自然の法則にそのものに反する〉と語っている。モンテーニュに従えば、生も死も自然に従えば良いのであって、自

然に従う生き方が最も良い生き方なのである。

このようにモンテーニュの死の思索は、死の恐怖におびえ、ただ額ら生きることだけに執着し、無益に生きている人々にイロニーをあびせ、逆説的な仕方死の良さを促し、死の不安や恐怖から私たちを解放し、自由に生きること自然な生き方であると語りかけている。どのように自然な生き方をするのか、そして自由に生きるのかは、一人一人の問題である。

以上のように、先人たちの言葉に耳を傾けて死の思いに耽ってきた。このことによって死の何かに解答が与えられたのではなかったが、死の思いから生の何かへの思いをめぐらせることができたようにおもわれる。つまりそれは死をみつめことを通して、より充実した生の在り方を探ることへの促しである。